

## 農山村における地域農業の形成と農協の市場対応

大分県下郷地区農業調査報告 ①

平 川 一 郎

(福岡県立農業試験場)

HIRAKAWA, I.

Forming Agricultural Region and Marketing through Cooperative Association in the Village among the Hills.

Agricultural Research in Simogo Region Pref. Oita. (1)

## 1. 問題提起

山村農業は自然的社会的に劣悪な条件のもとでいとなまれており、粗放的な自給的農業が多いとされている。一方日本農業の中で農山村と山村の占める割合は農家数の44%、耕地の41%にも達しており、山村の役割は決して軽視してよいものではない。このことは、近年重視され始めた食糧自給とあわせてみると一層重要な課題といえる。

大分県下郷地区においては、地域農業を守り育てようという試みが、農協による直販事業という形で行われている。この直販事業は、現在の大量生産、大量出荷という体系でなく、多品目小量生産というかたちを生みだしている。しかしここでは、その直販事業そのものでなく、その背景となっている山村農業の振興という視点で、この地域の農業の展開を調査し、その問題点を明らかにしたいと考える。

この研究は4つの課題からなりたっており、この第1報告は直販事業の簡単な紹介を含めて、地域農業の概況と問題点、直販事業とのかかわりで変貌しつつある農業の問題点を概括的にとらえることを目的としている。

## 2. 耶馬溪町及び下郷地区の概況と農業の特徴

下郷地区は大分県の北部を流れる山国川の中流域に存し、徳川時代は幕府の天領であった。昭和26年以降合併をくりかえし、現在は耶馬溪町の一部となっている。地勢は四方を山岳地帯でかこまれ、総面積の80%以上を山林原野が占め、耕地の大部分は山国川の本支流に沿った峡谷に細長く階段状に拓かれており、典型的な山村地帯といえる。

この地域は耕地には恵まれていないが、雨が多く林業に適しており、人工林の民有林が多い。このことは山林地主の役割を重要なものとしている。他産業にはとくに見るべきものはないようである。

人口の動きをみると絶対数が減少しており、老人の増加、生産年齢、幼少年層の減少が目立っている。中学、高校の卒業生をみると、留村率は2.5%、7.3%であり、

49年の新卒者のうち農業就業者は町内でわずかに4名である。

近年の農業の特徴をみると、第1に水田、畑が急激に減少し、40年以降に町で耕地面積の約12%、下郷地区で10%の減少である。このうち半分は永久転作によるものであるが、著しい耕境の後退である。第2に専業農家の急激な減少である。第3には水稲作への特化傾向である。雑穀、豆類など減少の一途をたどり、わずかに酪農が増加しているのみである。肉用牛なども石油ショック以降減少しており、野菜も安定しているといえない。

この地域の農業は本来林業と深く結びついており、零細劣悪な農業基盤を、山林労働や炭焼きなどに結びつけながら成立させていたと考えられる。したがって、水田の米、畑の大小豆一麦という自給的農業であり、炭焼き、山林労働の減少は必然的に兼業化、過疎化へと傾むいていったのである。

## 3. 下郷農協と直販事業

下郷農協は昭和23年に小作人農協として106名の組合員で発足し、当時の地主系の農協が耶馬溪町農協として合併するなかに、未合併農協として、現在では354名の組合員をもつ農協である。下郷農協の職員は26名で、職員1人当組合員は13.6人であり、近くの農協のほぼ2倍の職員数である。1方販売加工事業をみると1戸当2百万円をこえており、近くの農協が50万円にも達していないのくらべて立派な実績といえる。これは下郷農協による直販事業、そしてそのことによって農業生産を高め、農民の生活を守っていくという活動の成果である。

直販は開拓地の酪農民を守るために北九州の消費者へと牛乳がはこばれ、それが野菜や山菜、畜産物へと拡大していったのである。最初は流通コストや、価格の安定などの問題であったが、現在では農民の生活を守り、消費者へ安全な食品を安く供給するという観点へと発展している。いくつかの特徴点をあげると①安全な食品と有機農業、②農民の生産費を保証し、消費者へ安く供給、③加工の重視(価格の安定、就業機会)、④生協との提

携などである。

#### 4. 山村における地域農業の形成と農協の役割

前述のように下郷農協の販売加工事業は十分ほころうるものであるが、この地域もやはり山村一般の問題点をかかえている。まず土地基盤が劣悪で零細なことである。第3報告にてくる0部落はこの地域では比較的条件のいいところであるが、水不足、耕地の分散、農道不備などの劣悪な条件下にあり、なおかつ1戸当の平均規模は70aである。この中でも、下郷農協の組合員は零細な貧農層が多いのである。第2はこの地域における農業の位置づけを山林労働や炭焼きと組合せられた自給的農業と理解するとき、商業的農業の担い手が存在するのかという問題がある。第3は資本の蓄積であるが、この点についてははもとと小作人を中心とする組合であり、資本不足も当然の結果であろう。

このような条件下において一定の農業生産を維持し、農民の生活を守ってきた下郷農協の方針と努力は評価すべきである。その内容をみると、まず農業生産を発展させるということより、農民の生活をどう守るかということであり、そのことから地域にあった多品目少量生産、直販方式をつくりだしたことである。自給的農業を基調とするこの地域では、土地条件、資本の不足からいっても大量生産、大量出荷という主産地形成は困難であり、「かあちゃんの足をきびる」という多品目少量生産で出荷せざるをえない。またこのことは大市場との結びつきを困難にし、直販方式へと対応していくわけである。

第2には開拓地の酪農の役割であり、直販の中核として、商業的農業を展開し大量の商品を作り出したことである。売るものの少ないこの地域として、安定した消費者を獲得するための重要なテコとなっている。

第3に、直販事業を単なる販売方式ととらへず、生産

者と消費者との人間としての結びつきとしてとらえ、安全で安い食品を供給するとしている点である。このことは多品目少量生産とも結びつき有機農法の提唱となっている。

このような形で下郷農協の指導のもとに一定の地域農業が形成されつつあるのであるが、次のような問題点ももっている。まず有機農法、安全食品ということは、一方では「近代化」された大量生産を現状では不可能にしている。現在の技術体系は必しも生態系を重視した長期的視点にたつものでなく、安全な食品を長期的に生産するという視点での技術体系の確立が必要である。しかし、これが経済的にききあう形では成立していない。このことが中農として展開することを防いでいる矛盾であり、生産指導、試験研究のあり方などからみて大きな問題である。

第2には資本の蓄積であり、各地で生産をのぼしている地域をみるといずれも畜産や施設園芸を多量にのぼしており、技術的な問題でなく、資本の蓄積が問題である。下郷農協としては弱い分野であり、努力を要する問題点の1つであろう。

第3は山林の利用である。本来は山林の利用も含めて生活が行なわれていたのであり、ここでも下郷農協の性格があらわれており、山村にありながら、農業のみで生きていかざるをえない苦しみを感じられる。山林解放も又一个の方向である。

第4には全国的な農政の方向であり、選択的拡大、主産地形成がさげられる中では当然問題が生じてくる。全体的な農業、農政の流れの中で農協、直販方式に必要な以上の期待はかけるべきでなく、それはまた別の解決の方法をさぐるべきであろう。